



ひろせホーム通信

<http://www.another-family.jp/>

No.10 (2013.6)

千葉県小規模住居型児童養育事業 ファミリーホーム ひろせホーム 代表 廣瀬タカ子



子どもたちのホーム

川村直子

「ちゃんと座って食べるのー!」。おやつ時間、年下の子に元気よく注意する女の子の声に振り向くと、Hちゃんだった。初めて出会った5年前は、何をすることも心もとなくて、食事もほとんどのどを通らなかったのに、いつの間にか、しっかりしたお姉さんになっていた。甘えん坊だったTくんは、弟妹分の子たちにその座を譲り、自分のことは自分でできるようになっていた。

子どもたちはひろせホームで、きょうだいのように育ちあう。見知らぬ場所にやってきて、不安でいっぱいの子の心を解きほぐすのは、年齢に近い子どもだし、どんな風に過ごせばいいのかも、まわりの子の振る舞いを見ていけば分かる。ここでは安心して、ありのままの自分でいい。

「あなたが大切なように、あなたを産んでくれたママも大切な人だよ」。ホームのお母さん、廣瀬タカ子さんは時折、子どもたちにそう語りかける。子と暮らせない親もまた、生きづらさを抱え苦しんでいるのだと、血のつながった親を思いやる。うまく気持ちを伝え合えない里子と実親の仲を取り持つこともある。誰だって自分の生い立ちを否定して成長することはできない、とタカ子さんは言う。「親に助けが必要なら、支えなきゃ。でない子どもはもっと悲しい目にあっちゃう」。子どもたちが自らの力で人生を歩いていくために、いま、何か必要か。タカ子さんのすべての行動は、そこにつながっている。

次の世代に社会的養護のバトンをつなげたい、とスタッフの育成にも励むタカ子さん。

その背中に負うものが多すぎて、私は心配になる。けれどそのまっすぐな生きざまこそがきっと、子どもたちのこれからの糧になっていく。タカ子さんのもとを巣立った後、ことあるたびに連絡を寄せる里子たちの成長した姿は、その証だと思う。(朝日新聞写真記者)



『カエルの子はカエル』

柴田 誉子

子どもの笑い声にあられ、時に泣き声と母の怒鳴り声。ひろせホームは、いつも騒がしい。

ホームで過ごす一日は、あっという間に終わる。起床し、子どもたちと一緒に掃除。朝食の後、学校へ送り出す。幼児が走り回る中、食器洗いや洗濯、事務作業を片付け、ほっと一息ついていると下校時間が近づく。

夕食、入浴、就寝。気がつけば夜を迎える。そして朝。自分の時間を持つなんてとんでもない。こんな毎日を何年も繰り返している母は大したものだと、娘ながら思う。

ここ数年、私は毎月一週間程度、長男と長女を連れ、自宅のある大阪からホームの手伝いに行っていた。長男の小学校入学に伴い、そんな生活も今年3月で終わった。

今、振り返ると、なぜ私は遠路はるばる千葉の君津まで行っていたのだろうかと思議でならない。家計の足し? (いつもの手当で足が出ていた)、母の手助け? (あの人のパワーがあれば何だって一人でできる笑)。

以前、母に聞いたことがある。なぜ里親をしようと思ったのか。自分の親(つまり私の祖父母)が里親をしていたから違和感なくこの世界に足を踏み入れた、携わってみると毎日が面白くてやめられない、と。

私が、夫を自宅に残して、交通費が持ちだしになって

までも、わざわざ手伝いに行っていたのは、とどのつまりは、カエルの子はカエル、ということか。理由なんか考えても仕方ないかも。未来ある子どもを支えるのは大人の役目と、思っておこう。

最後に一言。手伝いを終えて自宅に戻ると、いつも長男、長女に成長のあとが見えた。言葉を覚える、家事の手伝いをするようになる、ちょっとやそっとでは泣かなくなる、自分の思いを伝えようとする、などなど。

ホームで他の子どもたちと接し、揉まれることによって、彼らもいろんなことを吸収できた。これが、ファミリーホームが導入されている意味なのだろう。



『4年間を振り返って』

万崎 美奈

私がひろせホームの補助員としてお世話になってから、もうすぐ5年目を迎えようとしています。これまでの4年間をふり返ってみると、ホームや子ども達の状況にも様々なことが変化してきたと同時に、自分自身も結婚・出産という大きな節目を迎え、共に苦難や喜びを分かち合ってきたような4年間だったと感じています。

始めは、『ファミリーホーム』というものが一体どんなものなのか、それさえもよくわからないまま面接に行ったのを覚えています。当初は、自分の仕事場が家庭の中だという、今までに経験したことのない違和感と身の置き場のない環境に、正直戸惑うばかりで、今から考えても、それを乗り越えることが私にとっては一番の大きな壁だったように思います。

それが少しずつ消えていったのは、ただ単に時間の経過だけではなく、自分の信念にブレがなく真っ直ぐすぎるくらいに深い愛情をもって子どもに接している廣瀬さんの姿に感銘を受けたのと、ホームの子どもたちが子ど

もらしく笑ったり、泣いたり、わがままを言ったり、自分の主張をぶつけ合えたりできている、そのごく当たり前のことが普通にできるこのファミリーホームというのが、とても微笑ましく、また私にとって興味深いものだったからだと思います。

しかし、現実の良いことばかりではないことも知りました。ホームの養育者は、24時間365日子どもとの生活を共にすることが基本であるが為に、休養や自分の時間を十分にもてないでいることが、体力面や精神面で大きな負担になっていることも痛感しました。

養育者が病気などになれば、わずかな人数のスタッフで勤務体制を組み立てる難しさや、さらには簡単にホームの存続さえ危機をおよぼす事態になってしまうもろさもあるのが現状です。

そのような不十分な部分を、自分のできることであるべくフォローに入れるような補助員でいたいと思いながらの4年間でした。実際のところ、自分の家庭との両立や、まだ手のかかる実子の子育てすら日々奮闘中の私なので、十分にフォローができていないことが多々あり、もどかしい思いにもなります。しかし、それを温かく見守り理解してくれようとした廣瀬さんや、自分のできない部分をフォローしてくれ支えてくれた他のスタッフ、私が仕事を続けていくことに理解をし、影ながら支えてくれている家族の協力、そして何よりもかわいい子ども達との出会いに、日々感謝するばかりです。

まだまだ人としても、補助員としても未熟な部分がたくさんありますが、これからもよろしくお願いします。

『ひろせホーム、私の2年間とこれから』

細井彩奈

ひろせホームでお仕事をさせていただくようになって2年近く過ぎ、もうすぐ3年目を迎えようとしています。

最初は戸惑いも多く、自身の役目がかめずにいきましたが、この2年廣瀬さん始め周りの方々の支えのもと仕事をこなしてこれました。

そんな中でも、実子とホームとの関わり、私の家族の理解、ホームの子どもたちの処遇や環境、行政の対応等、今まで思いもよらなかったことが起こり、もどかしく、

葛藤も多くありました。「なぜこんなことができないのか。」「なぜこうなってしまったのか。」「なぜ…」未熟さゆえ、何もできず、考えることしかできず、答えも出ませんでした。

しかし、児童福祉の世界を詳しくは知らないがゆえに見えた部分、感じた部分もありました。その思いはまだきちんと声に出し、形にできるものではありませんが、児童福祉の決まりきった考えや問題をひとりの母親としての目線で捉え提起していくきっかけとなったのではと思います。

そしてホームでも、まだまだ対応に戸惑うことも多く、悩みながらのことが多いように思います。それでもホームや子どもたち、実子とともに成長してこれたと思っております。ホームではあまり子どもたちと関わる時間も少なく、事務処理が主な業務になっていますが、子どもたちとの関係も変化してきていると感じています。

私生活でも多くの変化がありホームの仕事がなかなか進まないこともありましたが、本当に暖かく支えてくれた皆さんのおかげで多くのことを乗り越えて来れました。

また、廣瀬さんも大病をしながら、それでも子どもたちのため、ホームのため、ひいては補助員のためにと考え、行動される姿は教えられることが多くありました。ホームの業務だけでなく、人として教わることも多いこの職場でいかに成長し、子どもたちにとってほんの少しでも今後の糧になるような関わりができれば、少しは恩返しができるでしょうか。

今は目の前のことで一杯になり、余裕がないことが多い未熟者ですが、ひとつひとつこなしながら、少しずつ前にも目を向けていけるように、そしてそれがホーム、廣瀬さんの助けへと繋がっていければ幸いです。



今回でホーム通信 10 号ということで、節目とし、ホーム通信をまとめたいと思っております。そこで、今回は里親、ファミリーホームに対しての思いなどを補助員とともに語ってこうと思います。 廣瀬タカ子（対談：細井）



補助員（以下補）：まず里親になったきっかけを教えてください。

廣瀬（以下廣）：遡ると、親が里親をしていて、実子と里子の違いって何だっところから始まっていて…。実子がいるのに里親をしていて、実子と里子に対する対応の違いに納得ができなかった。というのも、これまで甘やかされてきたものが一変して実子には厳しくなったという事に疑問があって、私の中ではまったく理解ができなかったの。そんな時代があって、なんで自分の子より人の子が可愛いのか、と言う所に疑問があったのね。『子供は国の宝だ』という自分の子供よりも里子を重視した普段の日常の対応に差が出てくる事に納得ができなかった。結果的に親にすごく反抗した時期があってね。でもただ反抗しているだけだと、説明ができないし、納得できないとも思っていたの。そのあと、叔母のところへ養女のような形で出されて、里子のような扱いの経験もしたのだけれど…。目指したところは、親が、なぜ里親になるという気持ちになったのかという確認がしたいと云う所にあって、自分なりに実態検をしながら考え結婚をし、まずは自分の子供を産んで育ててみよう…。やはり子供は可愛い、経過中にはやっと命懸けで生んだ子が、可愛いし可愛いがゆえ、子供を取り巻く環境に様々なことや、先々には姑や、実父と確執や納得できないこともあってね。そういった時に、子供を手放す気持ち、親から離れる気持ち、親が自分に目を向けてくれない気持ちとかを徐々に理解をしだしてきたの。当時は、納得行かないまま経過を味わってきた。故に自分が里親をやって、親が言っていた『子供は国の宝だ』というのを私なりに立証したかった。立証するには、自分もそれを体験しなくちゃならない。それにはまず自分の子育てが先だろうと思って、自分の子育てを優先して、とにかく子供を育てて。そして、自分が目指す所と云うのは、なん

社司を見ていると、一人で山ほどの子供に関するケースをかかえていて。そのケースひとつひとつが子供の人生を左右するものであるのに、山のような処理の量を考えると、目が点になりそうな気持ちだが、それでも職員は真摯に向き合っている姿には神々しいというか危険というか…。これで、どこかで片手落ちになるのではないかなって。職員に問題があるっていうわけではなくて、そういう実態があるってこと自体が世の中のシステムとして違うんじゃないかって私は思ってしまったの。児童相談所の体制まで、私には変えられる力量はないけれど、『じゃあ、私が出来る事とはなにか。』って考えた時に、保護された子供は、甲乙つけずに受け入れられるものなら受け入れてみようと、誓ったのね。いろんな子がいるから…。でも選ばずに受け入れるにはどうしたらいいかって考えたら、まずは里親が集まって勉強しようって思ったの。実態を知っていこうってね。虐待の子供たちや難しい子供たちが出て来た時の為に、子供たちの実態を勉強していこうって。そのためには研修会、学習会を立ち上げればいいんじゃないのかって思ったのよ。

補：そこから研修会を実行されるために動いたのですね。

廣：君津支部長になって初めての試みでやって、取り組んでみたの。里親登録して分かった事は、児童相談所のことも然り、里親の心構え、対人関係の部分も勉強していかなければならないって事。集まるだけでなく、いろんな人の話を聞き、また勉強会のようなものが必要だねって、役員会に出したら、事務方は『今までも、研修会をやるという名目になっているのにやってこなかったから、ぜひやろう。』って言うてくれて。それで研修会をやるにはみんなの賛同を得なくちゃいけないから、役員会で、どうですかって聞いたら、『若い人が聞きたいって云うのならいいんじゃないか。』って。それで、やろうかって始まっていったの。そうなるって、それを様式化して、場所とそれに伴う形式、講師を呼ぶのか、どのくらいの人を集めるのかとか、行政説明なんかも必要になるだろうから、そういった場合、誰を呼ぶのかとか、研修会をするにもいろんな疑問点にぶつかってきたっていうの

も確かだね。結局研修会をどういった形でやるのかって云う事は、とどのつまりは事務方と私がやる事になって。同じ役員の方たちは、研修会に否定的というか、あまり前向きではなかったけど、『それじゃあ、分からないじゃない!』って言い続けてきたの。それで、とにかくどんな形になるか、やってみようと言う事になったの。

補：千葉県里親会の会長も歴任されてましたよね。

廣：政令指定都市ができた時期ね。初代の会長の時から副会長としては動いてはいたのだけど、会長になる時は、周囲から猛反発をうけたけど、私は納得できないからやらせてくれて、『あんたにはやれるわけない』って言われたけど、『全てが納得した行動として行えるわけではなくても、子供に関してのことだけは納得をしたやり方したいので。』って言ったの。手探りをしながら何か必要なのかって考えながら作り上げていったの。それで、突き進む内に何をやりたいのかって事になると、施設でもない、里親でもない、1~2人のこどもではなくて、最低5~6人の子供を委託して、親子、兄弟関係の様な養育をするのがベストだろうと云う事になったのね。当時、東京や横浜はこの制度を独自でやっているわけだから、千葉県でも出来ない訳がないだろうとずっと訴えかけてきたら、里親型としてのグループホームという形まで話が出来、その間に支援をしてくださった方々の多くのご苦労もあって、その方々のご努力のおかげで、平成15年千葉県として初の立ち上げをしたの。それから平成17年には今までに疑問に思っていた方々を募り、里親型ファミリーホーム全国連絡会が発足したのよ。多くの支援者の力を借りて。また、その1、2年はファミリーホームに対しての周知の為に全国至る処を私なりのやり方で、トレードマークのように乳児をおんぶしてピラ配りや活動のために恥も外分もかなぐり捨て働きかけをしていた時代があったのよ。

補：要保護児童との出会いなどエピソードはありますか。

廣：里親登録をした翌年かな。平成2年に、学園でもだ

めで、一時保護所でも、里親さんのところでもだめで、廣瀬さん所がだめならもう当てがないよって云う子が来たのだけど、その子が妊婦だったのよ。いろんな厳しいチェックを逃れてきたみたいで、その時、児童相談所も私もその子が妊婦だってことを誰も知らない状態で受け入れたの。結果的には病院で出産をしたの。当時の児童相談所の職員の方も動いてくれて…病院の先生には職員共々ひどく怒られたけど。その後も妊婦を受け入れる事もあったの。ある妊婦の子供は重い障害があったり、色々な子がいたよ。その中で特に私は、乳幼児の受け入れを主に考えていたの。昔ね、施設から来た子が何気なく言った言葉が本当に忘れられなくて…『子供を産んだら生んだ私が育てるんじゃないよ、みんなで育てるものなのだよ』って、言ってる子供に『え・・・？』と啞然としてしまう事実があったの。施設しか知らない子は、一般的に当たり前の事と思っている事を知らない事に驚きと戸惑いを感じたの。知らない子供に対して、それを知る権利と言うか、教えるきっかけや、体験が必要と強く感じたわけ。その後も要保護児童との出会いがあって、子供たちの環境に応じた多種多様な取り組みの違いを感じ、私から見た目と世間から見た目の違いや、一母親から見た児童の養育と、集団養育、国の施策とした養育の矛盾というのが、衝撃だったりしたの。

補：支援体制についてはどう思われますか。

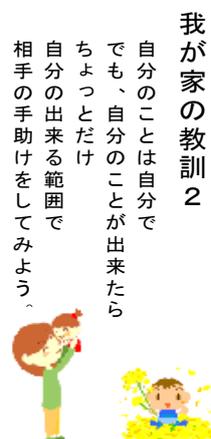
廣：児童相談所の心ある職員がサポートをしてくれたことが私としてはとても良かったと思うの。家族も支援体制の中に巻き込んでいたし、近所の方のサポートもあったし。でも支援団体からは、里親支援だからって言われても、当時の私には関係性のない、全然入り込めない地についての支援体制ではなく、ペーパー的なもので、理論的なものが多くて、受けられなかった。中には理論的な中にも共鳴できるもの、使えるものはあったけれども、実際にそれが皆に通用するかというところではなかったの。そういう所が支援体制の難しさでもあったと思うの。

補：子供達を通して見た支援体制についてはどうですか。

廣：やっぱり、改善していかなきゃならないものであるなど。関わった範囲の改善はしてきたつもりだけれども足りない…。いくらやっても、どこを改善しても足りない所が出てくるのも事実。また現実として、そういうところに子供一人一人の体制の難しさがあると実感してきたの。子供を取り巻く環境も、時代と共に変化しているし、年々問題も複雑化しているが、親子関係や家族関係が希薄な事が原因かなと思ったりしたの。そこで、親と子、実子と里子というのをもう一度見直してみて、自分が子供だった頃や、私が里親をやることによって実子の葛藤があり、実子から衝撃的な言葉を受けたり…。でもすべて自分が経験した事しか子供にも言えなかったしね。また、現実を言うにはそれ相応に自分の意思を全うしない事には、実子に言われたからと言って意思を変えていては、実子を納得させる事は出来ないとも思ったの…。その点は、実子と里子、親と子の長年の葛藤に苛まれながら、今、現在も進行中です。

補：今後の制度について考えがあれば教えてください。

廣：高齢者福祉と児童福祉というのは一体化したものでなくてはならないと思う。高齢者福祉は割と手厚くされているが、それにも良い処と悪い処が出て来ているだろうし、児童福祉も同様でだと思うのだけど…。やはり児童福祉と高齢者福祉は日本の柱として重きを置いて考えていかなくちゃいけない道であると、里親を通して感じ、長年関わって来たからこそ見えてきたのかなと思うの。今後に関しては、今までの実体験を踏まえて思うのは、介護福祉士とかヘルパーのように、特に長年要保護児童に携わってきた人がたくさんいると思うのだけど、対応策として、それ相応の資格を持つと、レスパイトも可能な制度に活用していけると私は思うの。そういう体制がまだまだ国の中には出来ていなく、体制の不備を感じている。



補：これからのファミリーホームについてはどうですか。

廣：養護施設や里親から受け入れられない子供、医療を必要とした子供達の場所、それと乳幼児。特に1歳までの継続した養育の大切さがすごく抜けていると思って。乳幼児の時期に一对一の愛着形成ができている関係って子供にとっても周囲にとっても、理不尽な関係にはならないんじゃないかって感じてきたの。安心した養育につながっていくためには、せめて2歳までは同じ人が同じように関わりを持って行く事。そのためには国民の義務化のような形が望ましいのかなと思う思いもあるの。義務化というのも、まだ小さくくりで細分化も必要になってくるだろうし、弊害も多く出てくると思う。資格を持ったベテランの人を大いに活用し、社会の義務化として取り組んでいくような体制も日本の社会には必要じゃないか…。そして更なるファミリーホームの担い手に繋がって行く事を願いたい。施設もいい…里親もいい…悪いところは改善していけば良い訳で、やはり人を扱う以上は、色々な選択肢があっていると思う。その中でも少人数の養育というのは乳幼児を養育する中では本当に必要だと、自分も子育てをしてきた中で痛感している。大きい子が小さい子を、小さい子が大きい子を、そして大人が目を配り、指導しながらしっかりと愛情をもって接して行く事で、子供たちも、次に愛を受け継いで次の世代を作り上げていくんだろうと思った時、やはり乳幼児の環境としてファミリーホームが一番良い場所ではないのかなと私は思う。障害児も、自立支援の分野においてもファミリーホームは大切な場所だと思う。でも、一番人間として生きていく中で基本となる乳幼児期のファミリーホームというのが今後絶対に欠かしてはいけないものだと実感をしてきた。また、現実化に向けての希望とそして期待をしたい。

補：そこに1、2人の少人数ではなく、5、6人のファミリーホームという思いもあるんですね。

廣：相互の育ち合いも1人、2人だと、子供を見すぎてしまって日常に閉鎖が起き養育者が煮詰まってしまう所

も有るのではないかなと思うの。乳児もお兄ちゃんお姉ちゃんの中で育つこと、多人数(5、6人)だとさまざまな子供がいて、子供同士の関係を作りあげ、自分(養育者)も何かを子供から学び作り上げていく。そう考えると、お互いに有効だと。やがてお互いの思いやりが、誰かが誰かに手を差し伸べる事、それは行動として取って来なければ出来ない事で、私は子供達を通して今までの体験から感じてきたことのひとつね。

補：最後にひろせホームの今後についてはどうですか。

廣：ファミリーホームってNPO法人でなければ里親の延長、個人プレーなのね。だからこそ子育てが真剣にできる。でも、これが個人プレーでなかったら、無責任な子育てになってしまうかな…。それではダメかなと思ってしまう。ホームの流れについては私の体調次第なので…とりあえずホーム通信はこの10号で締めくくりたいなど。また新たな体制になって、スタートを切った時にはホーム通信を再開させることもあるかもしれないけどね。

此れ迄、関わってホーム通信を通して愛情を注いいただいた方々には熱く御礼を申し上げます。 合掌

廣瀬 タカ子



ホーム通信「第10号」

入居1年目の平成14年に廣瀬さんに出会い、FGH開設当初からホーム通信のお手伝いをさせていただき、ついに10号です。この間、児童虐待件数は増え続け、児童相談所の権限は強化され、保護を必要とする子どもたちを取り巻く環境はすいぶん変わりました。

今は児童福祉から少し離れていますが、先日、久しぶりにひろせホームに行き、ずっと変わらないホームの営みを感じ、具だくさんのおにぎりを食べたくなりました。

寺元 真(元児童相談所)

ひろせホームの1年間

4月

大阪・四国旅行
始業式 授業参観日
千葉県里親会君津支部総会

5月

映画鑑賞へ
児童相談所にてケース会議
日本ファミリーホーム協議会・総会
千葉県里親会総会・研修会

6月

里親キャンプ打ち合わせ
児童相談所にて面会 (R君)
県・里親会理事会



7月

三者面談 (中)
夕涼み会 (幼)
海水浴へ

8月

里親会君津支部親子キャンプ
T君帰省・M姉妹帰省
児童入所 (T姉妹)



9月

体育祭 (中) T君の実母参加
Aちゃん措置解除
運動会 (幼) R君の実母参加

10月

R君入学前検査
合唱コンクール (中)
T君家庭復帰

11月

イルミネーション飾り付け

12月

幼稚園にて発表会
(R君の実母参加)
千葉県君津支部役員会
終業式 (小・幼)
クリスマス会
M姉妹帰省

1月

T姉妹帰省
Mちゃん3歳児健診

2月

お別れ遠足 (幼)
小学校にて入学説明会

3月

ディズニーランドへ
卒園式 (R君の実母参加)



家族の紹介

お父さん・・・

年齢と共に幼子の忙しさが身にしみて来てる気配。お手製のソーインググッズに子達の歓声に満足な笑顔♪

お母さん・・・

子達を残して手術にて、我が子ではないが、入院ベットの上で考えるのは子達のことばかり悲しい性かな。
子達に助けられ、すこぶる元気になりそう(´▽`)

Mちゃん・・・ ♪ (☆ 6 6) ♪

何事にも完璧を願い負けず嫌い。高いところでも平気、小さな子達からは憧れの存在

Hちゃん・・・ ♪ (☆ 6 6) ♪

光り物が好きで光っているものを拾ってきてしまいポケットに何時の間にか入っている。スローだが慎重派で物事をすぐには決められないかと、思いきや意外と外交的でもある。

R君・・・ \ (; ▽ ;) /

体は大きいカレーが大好きカレーボーイ。チョット病が気になるが自己管理ができるので大丈夫かな？

Mちゃん・・・ (・ω・) だてへぺろ♡

喋りだしたら止まらない、何にでも興味を持ち好奇心旺盛なダンス好き小さな子には優しいがしつこすぎて嫌がられしまうのが課題かな？

Uちゃん・・・ (・ω・) だてへぺろ♡

何でも食べる幸せちゃん。美味しい分ダイエットがむずかしいかな？誰にでもニコニコついて行ってしまふ心配ちゃん。

スタッフさん (恵まれたホームの人材)

Mさん・・・ ホームの要的な存在、我が家の子達を見てきて実子も参加の子育てに感謝です。

Hさん・・・ パソコンの扱いと速記録には目を見張り、また頑張り屋さん感謝です。

Aさん・Nさん・・・ ホーム会議の要でスタッフを支えながら、必要なアドバイスには頭が下る思いが本当に感謝です。全ての養護を必要とした子達を支えるためにご尽力を尽くされている方々に感謝の気持ちで心からありがとうございます。

Yさん・・・ お子達を連れ大阪よりの参加に子供同士がなれ親しみが出てきたがお互いの日常の生活の変化がありました。今年からは特別な日のみに参加支援として関わる事となり、長年の体験支援に深く感謝をしてやみません。

Kさん・・・ 大きな仕事 (新聞) の合間にホームの行事に参加をしてくれた、子供の幼い姿や小さな時からの関わりが普通に違和感なく付き合ってきた、良きお姉さんの様な役目に感謝。